

実践紹介3 (中学校1年)

キャラクターへ 手紙を書こう

ます だ みつる
増田 暢

神奈川県座間市立座間中学校 英語科教諭

本校では令和3年度から『Here We Go!』を使用しています。小学校外国語で多くの音に触れてきた生徒たちには、文法よりも内容から入るのがよいと考え、授業の冒頭では毎回、デジタル教科書収録の「本文ドラマ」(実写動画)を見せることにしました。「ティナはなぜこんなことを言うのだろう」「この二人は恋しているのでは」など、英語や日本語で意見を交わしながら、キャラクターが展開するストーリーに生徒たちはすっかり引き込まれています。

「ごっこ」ではない、本物の手紙を

実写動画の中のキャラクターのささいなしぐさや、言葉遣いなど、生徒たちはこちらが気づかないような細かなところに反応し、盛り上がります。1年生3学期に入る頃には、それぞれのキャラクターに親近感がわいてきたようです。おそらく、彼らを自分たち自身に置き換えて見ているのでしょう。ストーリーに夢中になるにつれて、英語が好きになる生徒が増えてきたことを実感しました。

そんな折、1年Unit 7のゴール活動で「冬休みの楽しい出来事を伝えよう」という課題に行き当たりました。「英語で手紙を書く」という

課題です。当初は、教科書に示されていたとおり、ALTへ宛てた手紙を書かせる授業計画を立てていましたが、ALTには以前にもお礼の手紙を送っていたことを思い出し、この活動に何か味気ないものを感じ始めました。ALTに代わる誰か、本当の誰かに宛てた手紙を生徒たちが書く方法はないだろうかと日々模索していたところ、活動のヒントを求めて視聴していたあるDVDの中で出会った「単なる『ごっこ』じゃ、子どもたちは乗ってこない」という言葉に深く感銘を受けたのです。「ごっこ」じゃない活動とは何か、生徒たちにとってのリアルとは何だろうと考えたときに、ふと、生徒たちがいつもハラハラドキドキしながら見ている実写動画の登場人物、教科書のキャラクターたちに宛てて手紙を書いてはどうかというアイデアが思い浮かびました。

簡単な英語で相手に伝えよう

1年生の3学期、3月の授業でした。「TinaやHajin、EriやKotaに手紙を書いてみよう。もしかしたら返事がくるかもしれないよ」と伝えたところ、生徒たちは大喜び。「ねえ先生、それって本当?」「よし、書くぞ!」と、たいへん積極的な反応を示しました。「簡単な英語で相手に伝えよう」と声をかけ、授業時間の最後の10分を帯活動として取り組ませました。生徒たちは1人1台のICT端末(Chromebook)を駆使しながら、わからない英語の表現を調べて、なんとか伝わる英文を書こうと熱心に取り組んでいました。その様子を見ながら、「これが主体的に学ぶ態度の^{かんよう}涵養ということなのかもしれない」と感じたものです。

生徒たちの手紙の大部分は、一度、教科書に

出てきた英語の表現を使って、内容を自分のことに置き換えて書かれています。教科書のターゲット表現は、一度教えれば生徒がすっかり理解しているということにはなりません。それまでの1年間、教科書で学ぶたくさんの表現を生徒が使いこなせるようになるために、何度も以前のターゲット表現に戻って使うことを繰り返していました。その体験が、この手紙を書く際に生きたのかもしれない。飾りのない平易な表現を使って、イラストを添えるなどの工夫をしながら、自分の冬休みの出来事を伝えようとしている生徒が多いようでした。

手紙の宛先には、メインキャラクター4名の他にも、Tinaの弟Nickや、中にはリスニング活動で1回きりしか出てこなかったような人物が選ばれたりしていて、生徒たちがいかにストーリーの世界に引き込まれているかを実感しました。

さあ、手紙を送ろう

ついにキャラクターへの手紙ができあがりました。「表紙がないと相手に失礼かもしれないね」と投げかけたところ、何人かの生徒たちから「キャラクターの似顔絵を描きます」という声が上がりました。できあがってきた表紙には、キャラクターの似顔絵が愛情たっぷりに描いてあって、見ている私もうれしくなりました。仕上げにリボンをつけて、完成です。

手紙を光村図書に送ってしばらくたつと、なんと返事が届きました。生徒たちに伝えと、大喜び。それぞれのキャラクターからの手紙を、目を輝かせて読み入っている姿に、この活動を行ってよかったと心から思いました。



生徒が書いた手紙の一部(表紙)

キャラクターは生徒たちの友達

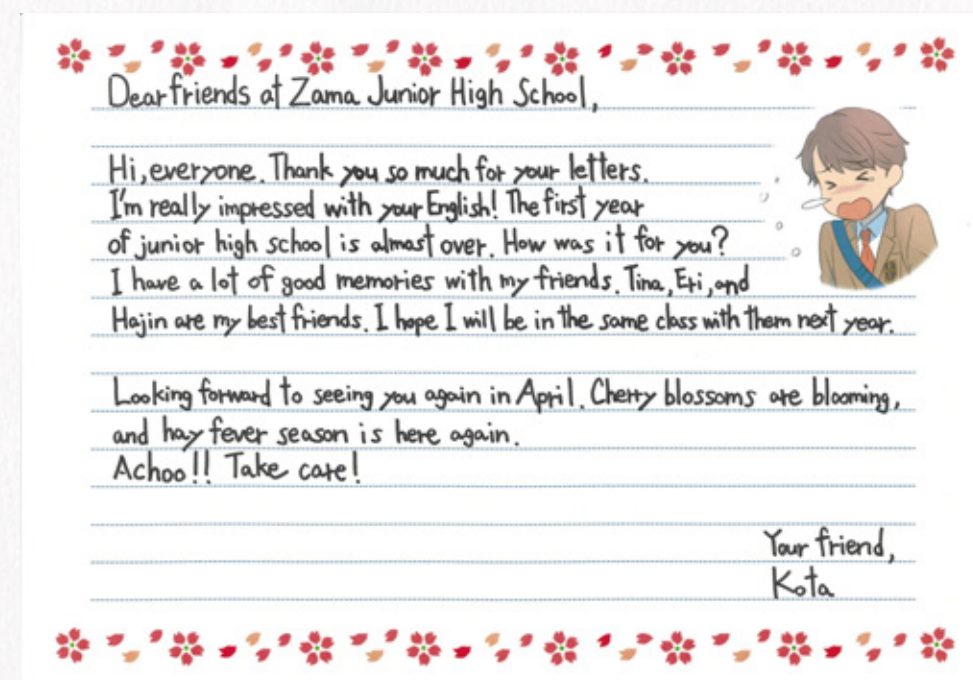
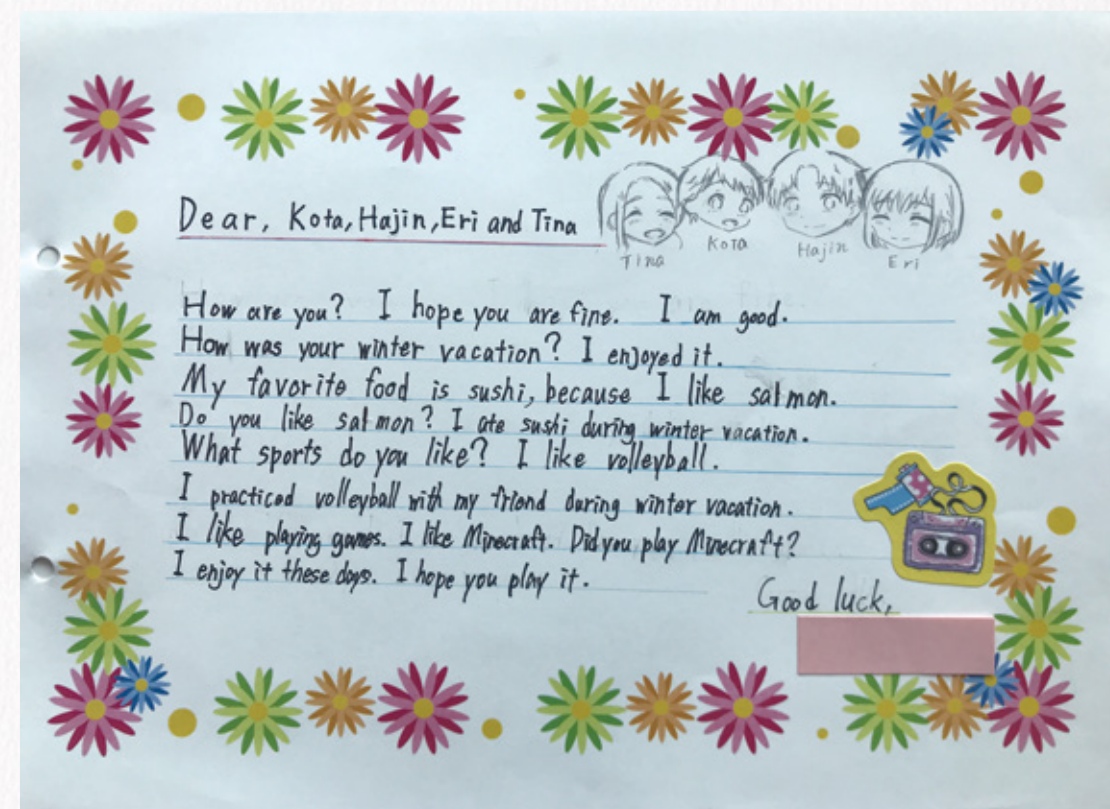
英語の授業では、英文法をしっかりと教えて、英文を読んで終わり、となる傾向があるように思います。それは多くの教師自身が教わってきたやり方なので、なじみと安心感があります。でも、本当にそれでいいのでしょうか。それがゴールとなってしまっていないのでしょうか。教科書の内容を理解して終わりではなくて、その先に「あなたならどう思うか」「これはどう思うか」などと意見を交わすことにつながる授業にしていきたいと考えています。

そう考えたとき、『Here We Go!』のキャラクターは、生徒たちの発話を引き出すきっかけになると感じています。今回実践した、キャラクターへ手紙を書く活動は、単なる英作文を超えた「英語で本当の自分の気持ちを表現する」活動になったと思います。それはきっと、生徒たちにとって、キャラクターと一緒に英語を学ぶ友達のような身近な存在だからなのでしょう。

英語教師としては、いつか生徒たちがみんなで動画を見て盛り上がったり、意見交換をしたり、手紙を書いたりしたことなど、中学校の英語の授業を思い出してくれたら、とても幸せに思います。

生徒たちの作例 /

こちらから、他の作例を見ることができます。



生徒たちに届いた返事の一部